



TITLE:

# 女児傍尿道嚢腫の1例

AUTHOR(S):

白井, 千博; 田近, 栄司

---

CITATION:

白井, 千博 ...[et al]. 女児傍尿道嚢腫の1例. 泌尿器科紀要 1980, 26(9): 1139-1141

ISSUE DATE:

1980-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/122727>

RIGHT:

## 女児傍尿道囊腫の1例

大船共済病院泌尿器科

白 井 千 博

田 近 栄 司

## A CASE OF PARAURETHRAL CYST

Kazuhiro SHIRAI and Eizi TAZAKA

From the Department of Urology, Ohfuno Kyosai Hospital, Yokohama, Japan

A 22-month-old girl was admitted to the Ohfuno Kyosai Hospital because of dysuria and swelling of the external meatus region. She was noted to have a 1 by 1 cm cystic paraurethral mass displacing the urethral orifice to the left.

Urinalysis demonstrated 5 to 6 white blood cells. But conservative treatment such as administration of antimicrobial agents was of no avail. Resection of the cyst was performed. Histologic examination revealed a simple cyst lined with transitional epithelium. One year later the patient was asymptomatic and had normal-appearing genitalia.

## 結 言

女子傍尿道囊腫はきわめて稀な疾患である。われわれは、幼児にその疾患を認めたので報告する。

## 症 例

症例, 1歳10ヵ月, 女児

初診, 1978年9月25日

主訴, 排尿困難および外尿道口部の腫脹

既往歴, 家族歴特記すべきことなし。

現病歴, 生下時体重 3220 g, 自然分娩, 約2週間前, 膀胱炎様症状を認める。その際, 母親が外尿道口下部の腫脹に気づく。某医を受診。精査のため当科に紹介された。

現症, 体格, 栄養ともに中等度, 胸部打聴診上異常を認めず。腹部平滑, 肝, 脾触知せず, 右腎下極触知。腎性状は正常。左腎は触知せず。尿管走行部, 膀胱部異常なし。外陰部では, 外尿道口は右側に偏位, 腫瘍は小指頭大, 正中線よりやや左側の尿道腔中隔部に存在し前庭部に向って突出していた。腫瘍は薄い膜で覆われ, 腫瘍内容液を透視可能であった。触診にて, 表面平滑, 境界は比較的明瞭で弾性硬。腫瘍を圧迫しても尿道よりの排泄および縮小は見られなかった。

入院時検査成績, 血液所見: 赤血球数  $425 \times 10^4$

mm<sup>3</sup>, 白血球数  $10200/\text{mm}^3$ , Hb 12.5 g/dl, Ht 39%, 栓数  $20 \times 10^4/\text{mm}^3$ , 尿沈査: 比重 1024, 蛋白 (±), 赤血球 (-), 白血球 (±), 細菌 (-)。

経過, 約1ヵ月間, 外来にて保存的治療を行なった。腫瘍は一時改善するも, その後増大し, 母親が背負う際, 局所がすれて疼痛は増強した。

治療, 11月2日, 全麻下, 経庭式囊腫摘除術施行。囊腫と腔との間は癒着はきわめて少なく, 尿道との間は強かった。そのため, 囊腫の1部と尿道の1部を損傷した。囊腫は完全に摘除。尿道はクロミックにて縫合, 尿道にバルーンカテーテルを留置した (Fig. 1, 2)。

組織学的所見, 囊胞の内壁はほぼ基底層のみを残す移行上皮でおおわれ, その周囲は肥厚した膠原性結合組織よりなる。

術後経過, 術後2日目, カテーテルによる異和感きわめて強きため, カテーテルを抜去した。その後, 排尿状態は良好である。

## 考 察

女子尿道憩室の尿道腔中隔部に存在する尿道と交通のある囊状の空洞をいい, 特に交通のないものを囊腫と定義されている。しかし, 実際, 臨床上, 交通のあるなしは不明確なことが多く, 現在は Wharton & Kearns<sup>1)</sup>, 伊藤ら<sup>2)</sup> は, 傍尿道囊腫, 膿瘍を含め広義

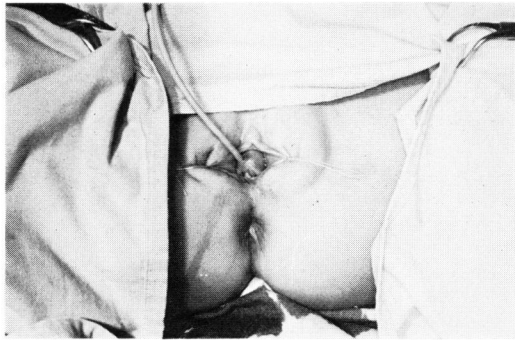


Fig. 1. 術前

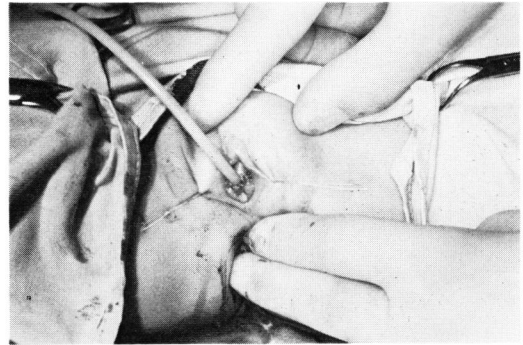


Fig. 2. 術後

の尿道憩室に含めている。

一方、山下ら<sup>32)</sup>は、手術的にも尿道および陰壁より完全に隔離している場合、傍尿道嚢腫と呼んで差しつかえないと報告している。さらに、山下ら<sup>32)</sup>は、陰嚢腫と報告されている症例も、前陰壁に存在し、手術的に尿道と交通のない場合も傍尿道嚢腫に含めている。

傍尿道嚢腫は、Huffman<sup>4)</sup>によると、一般には2~3 cm以上の大きさにはならず、どの年齢層にも発生するが、小児例はきわめて少ない。組織像は、低い円柱状または pseudostratified columnar epithelium に類似していると述べている。

発生原因 Johnson<sup>5)</sup>によると、

先天性原因として

- 1) Gartner 氏管
- 2) Wolff 氏管原基の不完全癒着による嚢腫形成
- 3) 胚細胞残遺氏管
- 4) Wolff 氏管
- 5) 陰嚢腫

後天性原因として、

- 1) 分娩時の外傷
- 2) 尿道腺感染後膿瘍の尿道への開口
- 3) 尿道への器械的操作
- 4) 尿道狭窄による二次形成
- 5) 尿道結石による二次形成をあげている。

特に、われわれの症例のごとき小児例に関しては、当然先天性原因が考えられる。Blaivas ら<sup>6)</sup>は傍尿道嚢腫は mesonephric system の遺残物であると考えられているが、mesonephric originであることを指示する cuboidal epithelium, muscular stroma が存在しないことより mesonephric cyst であると述べ、浅倉<sup>7)</sup>は傍尿道腺の retentions cyst, Wharton ら<sup>1)</sup>は新生児の症例を認めたことより傍尿道腺の先天的拡張が存在する可能性を報告している。

現在までにわれわれが集めた症例は Table 1 に示すごとくである。

年齢分布は、2 カ月以内 7 例、6 カ月 2 例、1 歳 10 カ月、1 歳 11 カ月各 1 例、6 歳 1 例となっている。小児例では母親がおしめの交換その他で常に目のとどいている時期に発見されやすい。成人例では、矢崎ら<sup>9)</sup>によると 20 歳代 6 例、30 歳代 4 例、40 歳代 2 例、50 歳代 1 例、60 歳代 1 例と各年齢層にわたって見られるが 20 歳代がもっとも多い。

症状に関しては、腫瘍によるもの 8 例、排尿困難 2 例、尿閉 1 例、その他 1 例となっている。成人例では陰前壁部の腫瘍を主訴とするものが最も多く、ついで排尿痛、残尿感および性交時痛がある。

嚢腫の部位、尿道口下部、前陰壁に存在するもの 7 例、腫瘍は尿道口下部に存在し、正中線よりやや左側または右側に偏位しているものが見られた。右側に偏位 4 例、左側 1 例。

嚢腫の大きさ、記載されている 9 例では、1×1 cm または小指頭大 6 例、示指頭大 1 例、3×3 cm または拇指頭大 2 例で小指頭大以下の症例が多い。

嚢胞液 Blaivas ら<sup>6)</sup>の症例では、多くの扁平上皮細胞を含み白色状を呈する。成人例では、黄白色膿液<sup>9)</sup>、黒褐色<sup>10)</sup>、ゼラチン様<sup>11)</sup>が見られた。

検査、触診、穿刺、検尿、尿培養、血清学的検査、腎盂造影、尿道鏡検査、嚢胞造影が必要であり、成人例も同様である。

鑑別診断、傍尿道腫瘍としては、solid と cystic なものが存在する。solid masse としては、fibroma, leiomyoma, neurofibroma, lipoma, myoblastoma, hemangioblastoma, lymphangioma、があり、悪性なものとしては、sarcoma botryoides がある。cystic のとしては、尿道憩室、傍尿道膿瘍、embryonic cyst, ectopic ureterocele がある。特に ectopic ureterocele とは鑑別が重要である<sup>6)</sup>。

Table 1

氏 名	年 令	主 訴	所見(嚢胞の位置)	嚢胞の大きさ	治 療	組織像	予 後	合併症
Whartonら <sup>1)</sup>	生後23ヵ月	尿閉	陰前壁から突出		摘除		正常	
Johnson <sup>5)</sup>	生後24時間	排尿障碍	腫瘍は陰腔内に充滿尿道を圧迫		破裂		"	
Kimbrough <sup>8)</sup>	生後5週目	脱水	前陰壁にあり尿道口右側に偏位	1×1 cm	穿刺	移行上皮	"	
Blaivas <sup>6)</sup>	新生児	腫瘍	尿道口左側に圧排	1×1 cm	嚢胞壁の部分切除	扁平上皮	"	
	"	"		1×1 cm	"	"	"	心室中隔欠損
	6ヵ月	"			"	"	"	VUR
	6ヵ月	"	外尿道口下部	3×3 cm	"	"	"	
	生後1日目	"	外尿道口右側	1×1 cm	自然破裂		"	右骨盤腎
浅倉 <sup>7)</sup>	生後2日目	"	"	小指頭大	造袋術		"	
	6才	"	尿道下部	示指頭大	"		"	
	生後2ヵ月	"	尿道口下部	拇指頭大	"		"	
著者	1才10ヵ月	排尿困難	外尿道口下部 外尿道口右側に偏位	小指頭大	嚢胞切除	移行上皮	"	

手術、われわれは嚢腫摘除を行なった。Blaivas<sup>6)</sup>は marsupialization を伴った部分切除をあげているが、自然に破裂する場合もある。成人例は一般に嚢腫の摘除を行なっている。

組織像、記載の明らかな6例では、扁平上皮4例、移行上皮2例である。成人例も円柱上皮、扁平上皮、移行上皮が見られた。

予後、小児例の場合、全例に改善を認めている。成人例においても、記載の明らかな8例は全治している。

## 結 語

1歳10ヵ月、女子に傍尿道嚢腫を認め、手術を施行した。術後の経過は良好であった。

(本論文の要旨は日本泌尿器科学会第44回東部連合総会において報告した。)

## 文 献

- 1) Wharton, L. R. and Kearns, W.: Diverticula of the female urethra. J. Urol., 63: 1063~1076, 1950.
- 2) 伊藤泰二・ほか：女子尿道憩室の3例. 泌尿紀要, 6: 218~229, 1960.

- 3) 山下源太郎・ほか：女子尿道憩室および旁尿道嚢腫. 日泌尿会誌, 54: 527~535, 1963.
- 4) Huffman, J. W.: Clinical significance of the paraurethral ducts and glands. Arch. Surg., 62: 615~626, 1951.
- 5) Johnson, C. M.: Diverticula and cyst of the female urethra. J. Urol., 39: 506~516, 1938.
- 6) Blaivas, J. G. et al.: Paraurethral cysts in female neonate. Urology., 7: 504~507, 1976.
- 7) 浅倉義弘：Paraurethral cyst の3例. 日本小児科誌, 12: 444, 1976.
- 8) Kimbrough, H. M., Jr. and Vaughan, E. D., Jr.: Skene's duct cyst in a newborn; case report and review of the literature. J. Urol., 117: 387~388, 1977.
- 9) 矢崎恒忠・ほか：女子傍尿道嚢腫の1例. 臨泌, 33: 595~598, 1979.
- 10) 山崎浩蔵・ほか：女子傍尿道嚢腫の1例. 西日泌尿, 41: 115~117, 1979.
- 11) 井本 卓・ほか：女子尿道下嚢腫の1例. 泌尿紀要, 16: 73~77, 1970.

(1980年3月10日受付)